高齢者の生活環境内で生じる日常災害の
最近の実態に関する調査

○矢島 規雄*** 直井 英雄***
Survey on building related accidents occurred in life environment of elderly people
YAJIMA Norio*** NAOI Hideo***

研究目的
日常災害の実態を把握するための研究は過去にも行われているが、災害を受ける高齢者に着目したものは少ない***。本研究では、NPO法人 住まいと介護のコミュニティネット 『長寿社会文化協会（WAC）』と協力し、高齢者の日常生活における事故の最近の実態を調査し、住宅改良など高齢化社会に対する取り組みの参考資料としてとりまとめたので報告する。

調査概要
（1）調査対象
社団法人長寿社会文化協会（WAC）会員の60歳以上1591人とし、60歳以上の同居者がいる場合はその人にも回答してもらった。

（2）調査項目
（a）回答者の年齢・性別（b）過去3年以内における外因事故の有無（複数ある場合は最近の2件）（c）事故の種類（d）発生時期（e）発生場所（f）ケガの種類（g）ケガの部位（h）ケガの処置（i）事故の改善策とした。

調査方法
郵送によるアンケート調査

調査実施時期
2001年（平成13年）9月11日～10月10日

調査結果および考察
郵送1591通のうち返送755通（回収率47.5％）、有効回答数1094であった。そのうち外因事故全体では481人（609件）、日常災害では258人（294件）の回答が得られた[図1]。その集計結果及び考察を以下に示す。なおここではいう外因事故は屋外で起こった交通事故等を含めたものとする。

（1）外因事故の種類別割合[図2]
外因事故全体でみると、「日常生活」の占める割合が約半分を占めているが、グラフでは小さくないが、次に割合の多い「交通事故以外のその他」では、その半分強が車道や歩道など外出先での転倒事故であった。

（2）日常災害の発生場所割合とその内訳[図3]

図1 年代別の回答者人数と被害者の割合
図2 外因事故の種類別割合
図3 日常災害の発生場所割合[上]とその内訳[下]
は5%程度なので、これには大きい値であるといえる。その他では「居間・食堂」や「台所」など、滞在時間が長いと思われる場所が多数多い。公共建築物の内ではスーパーなどの「商業施設」や駅などの「交通機関」が多い。

（3）日常災害種類、ケガの種類・処置および過去の調査（総年齢層）との比較

i) 日常災害種類について [図4]
「壊滅」、「転落」、「転倒」の割合が多く、その3種で7割近くを占めている。過去の調査結果を比べてみると、その割合が多いことがわかる。

ii) ケガの種類について [図5]
過去の調査結果を比べて、「打撲」、「骨折」の割合が多く、「すり傷」の割合が少ない。高齢者は身体的に弱く重度なケガを負いやすいのではないかと考えられる。

iii) ケガの処置について [図6]
病院へ行った割合が約40%と、過去の調査（約30%）に比べてかなり多い。治療したもののが即ケガの程度が大きいとは限らないが、ii) の結果を裏付けるものともいえる。

（4）日常災害（軽傷）の発生頻度推定値 [図7]
調査された日災害の発生時点から調査時点までの期間の2倍が平成的には発生時期に相当すると考え、発生頻度を求め、過去の調査における推定値と比較した。今回調査（60歳以上）の推定値は、過去の調査の推定値に比べて小さい値となっている。これは、調査期間が過去の調査では調査時点前1ヶ月としているのに対し、今回調べでは調査時点前3年としている違いが出ているとも考えられるので、高齢者の日常災害（軽傷）が実際の減少しているとは断定できない。

（5）日常災害の改善策の有無 [図8、図9]
日常災害にあって、何らかの改善策を講じた人の割合が36.5%で、その中の3分の1弱（全体でみると10%）の人が建築的な改善を行っている。最近バリアフリーに対する社会的な意識が高まっているので、改修例が増えていっているかもしれないが、それに関しては過去の調査がないため確認できない。

■まとめ■
本研究により、高齢者の日常生活における最近の事故の実態が、ある程度明らかとなった。この結果は、今後の住環境整備の参考資料になるものと考えられる。なお、本研究に際し、平成13年度東京理科大学修士中島優子、卒研生池田恵子氏、野村晴里里氏、および「NPO法人住まいと介護のコミュニティネット」「長寿社会文化協会（WAC）」の方々の協力を得た。ここに記して謝意を表する。